読んでみました

米濱泰英著（オーラル・ヒストリー企画）『満鉄技術者たちの運命　国共内戦下の逃避行』

福島靖男（会員）

米濱氏（協力会員）が新しい著書を刊行しました。

大連には満鉄の付属機関、満鉄中央試験場（以下中試）があり、戦後大連はソ連の占領下にあり、中試もその管理下に入った。所員は全員拘束され一部の所員は従来の研究を続けたが、生活は苦しかったようだ。物語は中試の技術者たちが遭遇した戦後の出来事の一つである。

中試は科学技術の基礎研究から工業化まで行う研究所で、約600名の所員を要する一大研究機関であった。中試の詳しい内容については、「善隣」誌の16年3月号に山口直樹氏の論文があるので参照されたい。

話はソ連占領下の大連の中試幹部に、中国共産党（以下、中共）から山東半島に建設予定の科学技術センター設立計画への参画要請から始まる。

この計画がもたらされるのは、終戦から4か月ほど経った1945年12月、中試燃料課の課長阿部良之助博士に中共山東政府から、日本人科学者・技術者の招聘要請であった。

阿部は研究室の幹部に相談したが、幹部たちの「吾々が中国の科学なり技術なりに貢献するということは、こんな時代なればこそ意義がある。吾々はもろ手をあげて賛成すべきである」との賛同を得たことから計画が始まる。阿部がこの計画に応じる賛同者を募ったところ、32名の技術者とその家族総勢127名が参加することになった。

一団は46年7月に密かに大連を脱出し山東半島に上陸するが、脱出者を待ち受けていたのは、激化していた国共内戦により、センター設立地が確定せず戦火に逃げ惑う毎日が続くことになる。そして、当初の目的が果たせないまま、不安定な情勢に翻弄される中、技術者たちの意見の相違が目立ち始め、集団は分裂しグループに分かれて山東半島を右往左往する逃避行が始まる。その後、多大な労苦をなめ、そして脱出者の多くが大連に戻る物語である。

米濱氏の手法は、膨大な資料と関係者からの聞き取りにより、1つの事実も複数の記録を突き合わせて物語を紡いでゆく。山東半島行きの主唱者である阿部良之助博士（合成燃料）の著書『招かれざる国賓』、阿部の協力者でリーダー格の井口俊夫博士（有機化学）の『ダモーイ』と戦後発行された『満鉄中試会々報』を縦糸に、石黒正氏夫人知恵氏が家族たちの状況や行く先々で出会った中国人たちのことを記した『北斗星下の流浪』を横糸に逃避行は進行する。

結局32名の技術者は53年まで山東半島にとどまった3名を除き、残り全員は47年末までには大連に戻っている。そして、55年までに全員が日本に帰国している。本書はこう言った事実があったことと、留用の1つの例を示している。